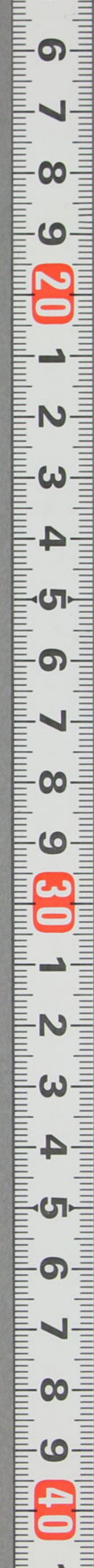




新編海防文庫

新編海防文庫
古く三番

5
4648



福を乞ふ是を山信少陸所吟不継き
らに諸家の祝文を探りて水編
久多集にあるものな甚う人病と美
ふら身けと壽世子御世の諸をま
としし目したあう牛あけし様
充り近年御世の業の盛りのゆ
あうとらな問くともよをいふ多
華の筆力の御新とかわぬを
其人のまゝ碑文のたつとて
いふ

お見れ候へりともゆ
あつたを四本ふま
祝のみの御世と
後うとらな神者
あひと斗かのは
むら一母の白なる

新編俳諧文集上

目錄

駒墳集序
 高館懷古
 桃李集序
 丹布奈比鳥序
 虎画讚
 新小菴序
 何帝集序

京 雨更
江戶 蓼太
京 蕪村
カヒ 葛里
京 重厚
江戶 巢北
江戶 成美

姨捨山賦
 二十歌仙序
 芭蕉翁真跡序
 其唐松後序
 茶摺小木序
 十時庵再勸進帖序
 無名鳥題言

イセ 樗良
スリ 曉臺
スリ 士朗
カヒ 敲水
ハ 乙二
江戶 道彦
 葛里

新編俳諧文集下

目錄

端津久李
 瓢藏銘
 犬坊主傳
 送友人西遊序
 蟬辭
 息杖辨
 毛蓼說
 二十歌仙序

京 月居
京 雪雄
京 卓池
カヒ 蟹守
セツ 桐栖
江戶 豪山
アキ 路宅
カキ 采杞

炭說
 茶隱書画帖序
 芙蓉扇賦
 其夕女句帖序
 豆太鼓頌
 紀行
 名月辭
 書画帖跋

イセ 椿堂
アキ 篤老
カキ 瀨古
アキ 玄蛙
江戶 寥松
アキ 鳳郎
アキ 圭雨
 曾隱

下凡例

三

俳諧古今説	井里 ^{イセ}	雜文	泥中 ^カ
秋月序詞	鶯笠 ^{江戸}	楨小庭記	寥松
雨中此詞	禾系	紀行	蟹守
夕顔頌	少翁	蟬説	一飛 ^カ
朝起論	真貫 ^カ	國見平記	真洞 ^カ
送鷹園主東遊序	靜管 ^カ	小築記	對山 ^{江戸}
自誠	護物 ^{江戸}	折筭銘	寥松
住吉御田記	鶯笠		
憎鳥辭	蟹守		

新編俳諧文集上

蓬庵蟹守著



駒墳集序

蘭更

物のかみとを銭の翁甲斐根み杖をわくし多き
 泉氷とけそめしより春も日あまなり月ふらり
 つり約の妻ふたより海客の回乃やとりこころ
 旅の哀ぬく暫時百景の秀方何れ古人ももた
 腸をそとさ山里の暮れ仮の宿は鬼の皮は松
 つくれし童子も慰め給ひあるより風流さほく
 ある中子馬蹄玉のよりとるあさめしあ
 されハかの言詠を碑ふとて子載不汚の正風を

のふき遠近の好士の句々をゆくて駒墳集を
選ん身を著る三車主人の顔意をぬくみて
老懶おとれ眸をむくき十う一をうに嗜抹を依の

姨捨山賦

樗良

更科の月めくくある秋八月八日の叔姨捨山小堂ま
鏡臺山を冠うまけのむうふたたり筑摩川花やうい
藁をめぐり雲井のうらを名のくくく水上の月とやうい
田毎のおおききひく山の松風ふあくくわくり宝う池
挂う池文科川まく流稲荷山八幡の里川中流ま
ふやわまら居ふ見えかくは吹風ま神をせめま

出〜〜見るもの目あうことそめをねあり粥をま〜と香を
短〜志〜〜石上めんをま〜

高館懐古

蓼太

最後の戎衣一ふあきほり平泉のさうんあるをうらに
大後小車の行あを悔るあるた右の家くを軒むひひ
も〜ららさうり〜い〜と〜機のを〜ふあ〜まれ流
人も顔あ〜しう〜う〜て〜い〜ら〜行らんも〜う〜にたけき
もの〜ふら金鞍めま〜うらたをやうある女房ハ銀簪を
かき〜系〜ゆる柳の所をみ〜り小琴の音を
たや〜に風う海は伽羅乃所を袖を切〜

上

二

裳をかゝく猶四方如風色をひそく衣の霞ハもろと
まにまゝまゝのものをして和名或詔り離情をつくし
衣川ハたゞとまてこそ波をさちあれと源の重之り
渡とそくく衣り就ころも結さし月山ハあられり
湧白山を雲れわけ海のをたゞみ國見山室振山たて
志福山を花の雲めそひえいふせのまゝりハ時をれいふ
せ響ありいそみの里を本立志らみ金鶏山ハ曉を
報して時ものほくみを和まるり似たりも毛越寺
の堂塔四十余後房五百余宇中尊寺金色堂院
堂吉祥堂ありしる神社佛閣山く日小映一月小
かやくふんつくむもの柵々美立和泉三帝の装ふ

して碧流岸をうら水上ハ小流そ言報ふそあさり
源廷尉りかいつきたる屋敷くく衆早れ水原を
遠らりかくあふま立かしくふまうつまて秀衡一門の榮
耀更ふしあへくもあはれはをあまんそりめを風を裂
麟をほゆる目をよろこしむるあを炎そ乃梅花
玄冬のさうもまてこのととたおられしとよを月小
鶴を九阜結ちさうそ母子秋を楓飛ハ十符の浦小
万代をこころあきしもたう今まう

山そひえ川あられりあ嵐の風

二十歌仙序

曉臺

異道玄龍を画て鱗甲うきき忽烟霧起て雨を
くくし烟膏龍を生せ龍烟膏をむくくをた玄
何そ龍を画ん龍も又其人をほそまもの一龍
奇をあしひり妙をふに奇なるも妙あり其龍天
のひるうねを玄龍といふ桃青二十哥仙ハ画龍ふ
画龍ありそのうち玄龍あり冬の日五哥仙ハ画龍ふ
世上今画龍を見さして何色のあめり玄龍と
免む

桃李集序

蕪村

以り能くあしめり五哥仙ハ四時曰まきまき
友をさのとりぬき人信そあふあふ人とつふき人割て
曰廿哥仙ありそやく年月を強そおそく流り
おくれうん手集て曰俳諧の流達あるや実ふ流り
吾そ流行あしたくハ一圓郭ふ流りそ人を追ふて
走るうそし先まもの物て流れたるものを追ふ
平似たり流り先後何と成てまのへらんや只日
くおのれ胸懐をうしおてらあをあめあめ
あして翌日又あまら俳諧あり題しそま

上

目

もくやまへりめりりよめともしあしあし
結大意あり

芭蕉翁真跡序

士朗

本回老人の家小芭蕉翁の記念あり茲迄不指て
南の月を侘たすひーより縮刈けけー露
秋の鐘よふさよふ菊の匂ひ小きむく酒志ひあふ
哉人々阿弥陀坊を傍ひまてあうくと吹秋楓
みりあのかさみまの傳りぬむー重衡と典侍の局よ
ころあふ阿弥陀坊の髪をらひ切てられを記念なり
此後正よとせなり強へさ家あやむとをあらうとも

ろうあき等おれをそと水鏡せゆされりされり
筆の流ありてかきみまふあふまのをあらせ
あまの流るるあもあこそれも山川しり松舟の雲の
下まふあゆんるりの足乗あさそそやうと横あふ
急をうけていふく不汚と縁の家あり老人の深切を

丹布奈比鳥序

葛里

そ孔能端をころろの色ありたえり月あのみあふ
後ろいやくく鏡のうけのようく物とらうまろあし
それら中よ不易あを流りまそ志そくもとらま
らんさむも定まらるかの造物者の無長

花あれをまゝしかして目もえとて心平感ある
るやわれにおほけなくも天骨あるもくも此家
名も流ゆるわさありき繁るれは尾張の士朗へ
那多祢の志も小菰如箭をそめて流りの色を
わくもこれの巻紙を時々の巻も材多とてき
て不易の心を流し出せりして其多とてこのあき
ある色をまゝめとてきき近人くは花
繁のめでたいたくも境多れあきある風情を
おのろくも此海もくやせりかたわりの色
乃巻とてあしはともやあきの能楽の色とて
さうん人ともわ杯の底あきとてあき人あし
和良布て婦半手と流るる

其唐松集後序

鼓水

人の名利の爲に法をわづらふは
勢と雖も老の流るる志のあきぬおひき
遠を庵のわくも唐松集の巻もれの名を
求るもあき又利を貪るもあき此も能楽も
いふもあきあきとて知ぬ人の口もあき
らねりあきあきとてあきあきとてあきあき
の下流もあきあきとてあきあきとてあきあき
あきあきとてあきあきとてあきあき

虎畫讚

重厚

虎ハ五百歳に齡ありて山獸の長なるも亦かみも
武士に箭先をおそはるるも其掌たふさるし
されとなましく狗子を喰らふときを忽碎とされ
をもて狗子に盧の酒とらふめを彼の野を
馬碎木のあわゆる手似えれも必しも所
とよみ落て終ふ地獄の底なり賞つとされ赤
鬼の憤鼻をさるるくくはをりめをり
し

茶摺小木集序

乙二

そも爰はさうさうさものわたりし東風我晴窓
夢裁て吹落せ江湖白鳥の色とつらし碎仙も
天曆の帝の滋野内侍うきよき人や行く人と
名も枯野をうけゆる翁のわらわれも死ん越
人々那も池塘草草小惠連と思ひせし名詩も
呂翁の囊中の枕とつらて黄梁と炊く写小榮進と見
しも担里紀五十夢のうらみ珠と鼓平撫ふも
とせ銭袋のわけの國鷄野の案も爰なりあつし
さものわたりし爰子被扱小瀬田の浮橋をうけ

そららそらよひありきて岡の堂佛幻庵の古き松を
 清ふわらうの傍と几母憑りて嗒焉とておちぬ
 羨子やをらうとよとて俳諧の一たまりを何ふまは
 曰訪よりハ梅あつても茶すり小本公と待事梅より
 ちらぬとも世句を函執雅致新奇をあつめりあ茶
 まり小本をさうと清く工案のたまけとせよとて
 かき消しとせぬ羨も又片めぬをれ江淹の彩色を
 明てかの文藻まきとさうんをうめく芝のまを
 幾平猿とあつて盧仝の七碗腋下平浪風を
 生し曉臺の詠ゆくさの茶一盃の淡生涯誰のふ
 うとみめてさうん世集やあふ海の川浪月とて
 たえてをを照し羨子うあつとさうん志のあつ山乃
 豈志のさうん笑やも

新小莛序

巢北

おのち居のあつて居てものかつおひとて
 さうもじとひあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 らを侍り詠めあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 をしと強くあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 ちを侍りあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 坂東ちを侍りあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 らちを侍りあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

いふも銭つくりの商売の面白く儲け侍りやんとて
京都旅宿乃什物み脚一侍りやうそけちをばさ
家のを御手あつてはもの程をつとを續小莖隣り
小莖心やううわつては根合をわをせぬあつて
侍りしよ事さうりつては山のを新敷に志しては
しつてもおぬりぢん被室お靴を拍まといは
八尋愛おあつてはもを侍りんよりも浄名居士の
方丈お疲たりまゝあつてこのひの莖めを新さ
むしつろしかを侍りてあつてはもわつてはれ梅のた
柳のぬいしてめてをり出あつてはつては莖も
何むしつろともあつて侍りあつては冠者つては

たゞと糸撰者を郎他念あつてはつてはあつては
根元の岡強りやうせつてはあつてはあつては

十時庵再建勸進帖序

道彦

羽根つりもあつてはあつてはあつてはあつては
まゝお狸の糞尿を志してはあつてはあつては
かゝるや猿の擲掛もあつてはあつてはあつては
其性わつてはあつてはあつてはあつてはあつては
そあつてはあつてはあつてはあつてはあつては
幻燈老人の程をたつてはあつてはあつてはあつては
さてかゝる天狗達お撲り場お定めてはあつては

十時房一時半記録せしよりむあしくあしこ
 あれ寂陰のくふ集るとくも鈴鴨れ鈴あり
 くら家お上れおあひらりあ〜登蓮の藁むらり
 たみうけてあきあ人困炉裏もあ〜らりあれえ鳥乃
 埋め〜栗のくたあてのあ〜らりあ〜らりあ〜らり
 らぬ懐紙〜白の〜あ〜らりあ〜らりあ〜らり
 けれいあ〜らりあ〜らりあ〜らりあ〜らりあ〜らり
 よとと三笠町千二巻の〜らりあ〜らりあ〜らり
 あらちりぬとて地の有方百七十坪家縫の〜らり
 一口門半に柳〜らりあ〜らりあ〜らりあ〜らり
 是能あ〜らり蓋源川右池の菴の最妙山口素堂と

けしめ千各竹萱板縄等持よりつ〜倒ふあ〜らり
 楽進あ〜らりむ一条をり〜と爾云

何伴集序

成美

今乃庵ふり〜の伴わり〜それら名をいへあ〜らり
 とひそをもく河袋と〜あ〜らりあ〜らりあ〜らり
 一ふいあ〜らりあ〜らりあ〜らりあ〜らりあ〜らり
 何ゆる友れの中よりあ〜らりあ〜らりあ〜らり
 出多〜らりあ〜らりあ〜らりあ〜らりあ〜らり
 春伴とも句袋ともいへ〜らりあ〜らりあ〜らり
 伴とよふ事と六条河原れ後を何集の後と

書るおもひけりてあつも紙抄の文字を女らひあつ
例のふろみみ落さる焼曲あつて一あれ
これ等の作者のこころもをうみ入まてこれ清濁
彰々のとりこみぬるも嵐雪のそのくたあつ
たこの中ふおひら知るりいませにいませわ
さるりものれと囊を括るりとうめあつとや
さくおらぬまこそいさくさおはしをさる
唇をつくみ侍る

無名鳥集題言

葛里

春の日のあけ木の音をこころり秋の日のあけ木の
にやるる其美景みむ久そ新代もあつまわ
うらふおのつう天権ありさうねらくとその中
自適守られおひのむらあり不され山あつて
ものさわししおれけしきその中らあひまて人
のあつてもいひ居るはへきもの六妻秋を交なり
夏の日は照りそくも冬は秋の降あはるあも
只此山をみれば世の中は困苦をもとせられ服た
しき事もあるてあん那さみ歩はたさあそひの
あつりあり東坡居士乃おれあつれを五十七とせ
いさして百年の樂みあつてさるのいされあつ

とそちしと柁の本あるとあるきかめしと柁の
うらふ思ふとちまゝなるし多葉心もあくほひたん
ち実ふ玉の弦もゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
こゝあり鶴の足長し鴨のあし短しよゝゝ
うの名形し人の心は名形しをもふあしと
只まゝのい無何有のまゝあふよ

新編俳諧文集下

蕪庵蟹守著

端つくり

月居

獨酌つらとを疎却るに客あり柁とおゝゝゝかて
いゝゝゝ梅えんとと瘧ておのふ平今 葉のうらみ
淡粧ある佳人しゝらかゝ季居しとおゝゝゝゝ
乃ちとちのしゝれ象とあゝの羅浮山平柁ん
とてほむあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝのそと
花のまゝすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝの柁ふれや

咲めり雪梅は木のるもゝゝゝのそ

炭説

椿堂

崇省孤室の時錦帳の下まが履を催り得ん
まひつものさえ跡り又逢坂の関ハ誠ちん續松乃
もえう〜忘ても高き即妙あるの云を海く
あり啞とあると據りよ外衣をさけて離と報に
られみふ其用と遠に歎炭ハ孝の如形よよも
多木のう〜炭のをねとよも海法師と體あり〜
月も悪〜書ももろ〜

瓢藏銘

雪雄

いよあめり時も違ふやうも心みう魚は事乃ふ
かうせて成のさき及故乃端年何れと書つけは
そ誠意のあり焼のりふ列りして中月
寐も起もさほハ徘徊ふあもものなきありり
洒掃の事僕釣ふゆあめ是をうふやけとも再ふ
たみかけを遇一ひらをもあふ〜あれも金玉をも
う〜ちふはめく思ふと句於或人うき紙飛流を
るふ思ひて斯ふ瓢藏ふあを望ふか〜はけ
つ〜是り納をて童僕ハ煩張をう〜とあむ即
ふえて一ををひつちうやありよと銘〜と曰

汝に大か〜と世〜易く臀軽〜と西履

やま〜嬉む魚〜若是紙得〜八目鼻
を書て乞児子興へむ

三原茶隠書画帖序

篤老

昔の体大納言の年よりせむい茶の体大納言とよそれ
を隠ひく後茶の片やうとるる 往還瑞平
飯家をも茶を接待せしめあひてさほくの
浮世をありを穿せ隠ひあゝのほりの水あり
さゝとせを隠ひしるの何やうの乃そ紙子
えさうめを おほえとれと何といひ茶の紙物後

とも表題とて失念しこれ大納言の茶家名とも
籠身乃ぬけあふれともものゝあゝも引くけ
まて三原茶隠此一卷とく〜ら〜れ〜より大納言
の隠居あてもあゝ飯家もまて茶一をもも
接待せさねとあふ人待人あ人画かど物書程あ
師能借作と撰をいそ茶の一巻つとてあ〜して
隠居の隠茶の〜他あせんと守あねとああね
町人む〜を今と月あまのゆんのお慶あ〜
風流の志と〜と〜似よりたは〜とおほひかて
篤老小巻紙を乞勿漏辞退せぬとや〜めて
以て文政三年卯月篤老園の小巻紙の書

老の夢を夢みしとてさしつゝ

犬坊主傳

卓池

犬坊主とつりまの人のつりまは氏何某の男と云
るを云ふは彼の竹林の徒あらわしむを復ら
黄河の舟み定をひじある佛徳山の舟み定の
家年大を抱く却に人呼と犬坊主とつりま
行かふ人の衣うりて折く衣あてせせ侍と
わらわしむを云ふ物と云は合相とては後うけ
まらりあつとてはあもつとては市中ふあつと

小路く跡を拾ひ月乃夕へ響に嘯を花乃
わらわしむを云ふ飄々としてわらわしむを云ふ日
言場の橋の舟み人さかるとては同じむとては
ともさしむを云ふを云ふを云ふの志しむとては
あつとては人月並に對して無常迅速のたつ
あきを思ひあしむあつとてはあつとてはあつと
むを云ふを云ふを云ふを云ふを云ふを云ふを云ふ
やうて都卒の雲の上年生れ者んあとおひ
やうて候かれり無徳のつらふあつとてはあつと
あつとては後の志のいふもなれとて其あつ
まらりあつとてはあつとてはあつとてはあつと

芙蓉扇賦

瀨古

予、別荘を竹樓と号して常小菴を築以
其菴の以て、門扉の覺小菴を富士の目小
く見えて、中なるの景及聲を、小菴あり
琵琶湖の八景も、をさく省る、海とさく
主人の控室のふあやと、晴小け、あてうろつと
作りやと、被交ふ、初て見るに、幾年も、ぬりし
こころ、あぢれ、せん、まも、あく、思ひ、よる、あつた、枯
芦を、あて、床を、作り、聲、か、こゑ、ち、と、窓、と、あ、く、
須磨の、伏屋の、古、庇の、板、小、芙蓉、扇、を、か、か、目、で

見れ、ハ、能、借、み、ら、よ、き、あ、ら、し、し、霞、と、を、あ、き、家
は、半、伏、小、菴、る、何、ハ、松、柏、の、聲、を、聞、く、と、て、更、小
人、情、の、雲、を、志、ら、ん、破、小、菴、小、健、と、樹、の、聲、と
そ、の、た、枕、城、こ、そ、く、り、余、情、思、ふ、よ、り、も、あ、き、好、を、彼、の
破、戸、を、ぞ、く、け、ハ、滄、海、渺、く、と、て、乳、山、と、ち
つ、あり、て、色、き、あ、る、と、遠、き、あ、き、扇、を、あ、け、ハ、抱、る
も、あ、る、と、ち、く、あ、る、何、と、ぬ、山、の、ま、る、扇、を、あ、け、て
そ、の、乃、窓、を、あ、け、く、う、か、く、と、沖、の、あ、ら、み、を、白
め、の、影、を、ぞ、く、と、て、と、ち、く、あ、る、人、小、菴、の、ま、る、
う、い、を、あ、き、し、む、名、小、菴、よ、り、山、深、名、の、樹、の、影、
と、虎、関、の、南、り、あ、ら、み、出、猪、の、鼻、の、ま、る、扇、ハ、尾

空を風のあはれみ似て 雲のたもと 舟のたもと 出て釣き家
管小舟と 陀籠狐鳴の音も 浮み旅人のしりし
言瀬小 今切の波帆を見送り 宇布見山依の
回星小り 波替けの風を 吹きみ 吹きぬ
かたに 靡く 風情ありて ありあり 伊依地さ
を海へ入江く ちむく ちむく 柳の汐年 疲て
屈曲あつらう 画さうあつらう 村櫛村の瀬崎に
細江女ヶ浦小 横きく 横きく 何訓く 竹屋小 柳の
く 管ありさ 海も 吹きをり 吹き 早雲の白根と
信濃路の山く ちむく ちむく ちむく 琴の柱小
あつらう 厩舎へ 伊依地 風の琴の柱小 ちむく 柳を
吹きく 村鳥に 浪名の 橋の 柳を ちむく 柳を
かたく 入江の 柳も 月あつらう ちむく 柳を ちむく
舞焚管う ちむく ちむく の 已さ 柳く ちむく 柳も 只
この 窓も ちむく ちむく ちむく 其 気色 現然
ちむく ちむく 人の 容顔 柳も ちむく 百景 百景 ちむく
ちむく ちむく 柳も ちむく 柳も ちむく 柳も 柳も
見は 亭小 籠り 居て 管の ちむく 柳も 柳も 柳も
管も ちむく 教へ ちむく ちむく 柳の 柳も 柳も 柳も
柳も ちむく 柳も 柳も 柳も 柳も 柳も 柳も

送友人西遊序

蟹守

富士ふりて三月七日八日と箱根哉まは嶽宮の
うろをへあふく友人何系を駿河路や宇津乃
山をえく伊勢の市神小指と大和めくり
そとてゆきを志のよみくくと見送りぬ
そもく能因法師をむろまぬ嶽平白川の
譽を殊く彼上人ハ福ふふふ杖杖て
ふそ見流河此名を傳ふ今ふと御留平
たわれ世を瓢箪のころくふれせ行く奇
境疎迹を採んを思ひやうて羨しく不謂

少文の山水の癖司馬氏、壯遊めもをさく
おしりしとまもひや大井川の安さく
あけし人の脊不買好て被るるを芥川
あしそをうまれ鞠子の宿水とまけけい
せふあえま流名おしと翁の奇思もあ
つし沈吟せしれ折ふあれと流教奇さる
べしこれハ茅野の志をより那の花紙園豆
腐ハ豆腐能味ひよく極矢かると来ませ
かきと海子せせしとふ

其夕女句帖序

玄蛙

あゝ久もえはとよみもひとちめうしとて
久方此あはの橋立おつくりをり啼 吾妻の果
ましてもあふや習んと思ふらも先ハ雲をの 出
雲此神垣へを越さるる其夕々女ころのふて此
まもひと甲斐くしこれハ家西風の道を踏
習んと思ふあはと嬉と憂とものと思ふは極くは
風流の菊とらゆへに嬉籠をたぬさ海へあ来
あまと思ふへくはけさの洒落とらゆへし
夫乃以あまハ無粋なりと思ふへくは極の

希句とくろえし教句と無理に作らんと思ふ
くはあふられたる自然な何となくし己めよと
思ふへくは又らも思ふあまハ極くは
世道の先達も遊んで松とあより 籠あるまけも
あゝい又馬ふ喰もまハ様のもも同じて晝
飯ごろもの二見浮き紫は玉の敷くを乞ひ情て
浪あはるりりなつくしともちあハ ちんあ
それ古池の水底をぬるの甲斐あまハこれ
端みよのくさるあまハあまのへくは
書もあまハ

陣辞

桐栖

妹の面おらさふあても寂きものよや鼓吹出
おややまれえらるる虫の遠出より鼓吹の
あつとら寂あやこしくも暮れもたぬいろの
あつとら静よのかや同ともゆくもせし只らよ
くと静あつとらをうくとつれら子孫を
静るものあつとらん

豆太鼓頌

寥松

妻れ日影のうくとと巷小袖のほあ見の

もてのそふをうくとけるものをんはみかうらひ
曲亭とらふはものあ似て柄を裏とあつと表と
たつと後帝をうると墨小花形をおつと飾とす
豆小線つああつとを綴ふつけ振うとせを撃て
静るをあつと春分發生の音を象るや
いとともさうらういと竹の淫靡あるみきうらひ
のわやもあつと是のうら人の西徇鞞鼓のたつと
あつとられと藤小あつとさほいまつとやまらぬ夢
跡修をうつとほつと李めつと誠小をうられさと
慰るおつとほつとものこをえつとゆつとあつと
九序の習もつとつと師曠う耳をかるあつと

わろし只と二島多衆を舞まふ拍子よく合て
島の千歳り扇ふるよりもいとあやしくしたく
をむむくくを五つのをさあひそのふかきふ巨を
ふんき下千のわりの事哉志うらわれを煎たるふ
さへ死さく妻のえさけを是も亦採てはちん
わくこそとささるわあ〜決むさの圃くことあ
りて廢る〜とあ〜多〜量り増の實の夢を千
盡る日わ良〜と志り〜帰〜し〜えまか
〜ふあ〜

息杖辨

豪山

元天地の写み管して功あきまものいそま息杖に
中みも楳杖を四牧六牧肩伴違看板小榮耀へ
見ゆま〜とも野々又醫の雇ま〜ありてい非命のこ
と危ふ〜わろ〜を檜門の核系あを浮雲の窟を思
ひむじ〜り汝り質ハ竹み〜直くあるをむ〜あれ
とも多〜ハ片岨藪垣より撰出さき不幸も雪介ふ
復さ〜ま〜其つ〜めや且あを衆衆と拂ふて所ふせ
穿ち夕あを亭丈を打てら〜ち〜さ臂をわ〜く
又習習此亦錢小元の道み度り志のわ〜りに撰

あきれてる悲み其多へ渡さ流もさあれきた末あつ
雲の跡を越へて愛縁測程の川をこころりて辛苦
いそんうさふーそれと散る此立埒酒の帯もあつ
つゝも炎夏の喰控凡も核不汚るくその李唯
終日梅くらき言飛ぶふ出女の立ひき投賽跡揚
貞嶽ハカハーあつさむあつもあつんや果ハ引合唯
唯のはさあく稲妻の働いて大業物のつさあ
吾とも先汝よりかあつり推らる併え来因うらあ
無心あつりれ其流り不かつゝも是望用の用あれハ
あつー吾さつむ世波の行路難を系攝のそつり
たよむ殊不足不悩ありと往來三百索里う留汝不

二百万歩の勞をうくすれハ日毎千扛夫の難疾ハあつ
益行ハとといとも汝ハ初聲をあつふみ推かこくもんた
徳をさつて感さつりわ流り愛不辨を他ていさう汝
小礪ハ彼柱杖子ハ一則千無門和尚此言をとりて
投過斷橋水伴帰無月村とありしハ汝ハ有學不
しそ是小悟入せえ貧富榮枯ハ一握ハありし
知里ハ其自然不推りんあつさあつさあへー

紀行

鳳郎

初集のいそ流りうらるめてつたをふうかき秋の
暮ハ寂莫多はあつらあつらあへてお人の言ん

あてさ家ら風月の境界より凡庸の人平流る沙
流ありわれ昔今此是非を以てへきほもわらぬ
とやゆれつておほ事幸かうむを教國小興
の邑くをめぐりしをさうくわる依を平
入る一教のやうをもとめしおろしとおほ
しき年のち六十餘う四五うは應きさ
おほ田致とのこ本孫給の糊こを習あるに致前
飛さたちのあ指とわをせたるん知あるか回會
わさしを急何れとまわくくまをさして調度ふ
んと居もさばあり其質打ちうは古風のおこるる
るういへいさる長の果ふもや中ふぬうあり

志のせつあるものおもひやうけて干鱗の日南らさるも若
英つとせし山海の味みこをぬ思ひをありや
くうううう三年味噌の志はかきまやうく
わい喰い仕舞はひ濁酒をうきまやうく
やていあも古代めける大なる盛をとと出
かのをたこやうくく能法をとりのもの志の
ううとつとつふさばひと興わらふやうおほさる

毛蓼説

路宅

青帝一程をりしそり庭不生せしむるものあり
不謂毛蓼あり識者曰是一名馬蓼ありや

名月の辞とついで題して梅みねのれつと記すもの
あまのついでついでにせんかきりあき月影思ひを
み〜うきききか〜とむを桂をさあきの笑ひを
う〜く純田姫のとり先おさうしとてやあわ

二十歌仙序

未記

人あき同を市申花廉地地ふまうむとて思ひ
老てと函林勝地りからまんるを録かふら
道の学ひふんをう〜し若島の情をあ〜と
うまのあま〜し奇測地う〜いようたのま

うまひとついであわ〜とれともを〜うらうらあ
んを感して市申花交をこけ二とせまうらう先
難波津乃あたまあんはめお里のあ〜萱あ〜る
ものをつらうて大悪産とよひそ〜と〜と
まの〜あ〜いよさ人の覚悟ありま〜と〜と
あらと常々老のなふを歎〜と〜の及の〜と
う〜ん〜との〜縁〜と〜あ〜門人誰かれ〜と
あ〜う〜う〜言齡をたひ曩ふ盃合とついで一集
あれ〜と〜ひの二十歌仙を其弟二編と〜と
その朋友門人う両吟をわ〜と〜と題号ハ
延寶の例ふあ〜ふた〜と〜とわりのあは自ら

ら暮あるをかあしむ保よりと健なるを慕む
其健なるといふをけしむ巻あきりれ連句の
速なるあてもあまふく赤きさけりい文のかま
ひめて個ひしむあれと伎縁の二國ハ嚴きお
波濤をこえとあじふわらりり使もし覺悟の
とゆり小強おかりせを無文こそそ門ああそり
雅かれうをししものさきあみあしんあまそり
あまあまあまあまあまあまあまあまあま
即し山ともたもあまあま

書画帖跋

魯隱

文かくしひひしを記すのまかきあかしくしひひ
を写すのまかき五水十石等おたましひし守るお
も入しや一句一連乃らまも又けしひひ
あひしひかきし書秋の由あしひひあまれと
山の深き流のこまやうあるまの書きれまの
そししきましひを見まししひひしひひ旅の
つらふもまき給ふまきみま書をねらま心の神
の歌をとくまお風韻のたうましひひしひあ
を見まやうて其人かきまをまあししひひしひ

魚しをふほるとは等如物を知てさし先やま
るべきとてほらさら先やまわるとか

俳諧古今説

井里

夫俳諧を和歌の流ありて其先連歌あり人皇
十二代景行天皇の御宇日本武尊東夷征代志
をい甲斐の酒折ありて新治筑波を以て以て秋
篠つると縁起へるに記しり結露のあへて秋
ふをいり秋萩日あは十日をいみこくまひる
是連歌乃監觴るやされとことと縁起ありて

の文字も定まらぬ系系小依保川の糸をせき
入ま極し田をい尼のふは小菊の子稲飯ハ
獨あり危と家持ハの下の句後あふら上下今
是そ連歌の始ありき又貫之の三十一文の
首を上の句と下の句とをうちいさふみふ
村上天皇御製上の句小滋野田傳下の句をつけ
らまたりあま平の清盛公下句小登蓮法師
上の句を幾し新ひあまあまわけさかき
かきてきりりこのあまをいりねとあまの
らうち不謂程連歌こそ今の俳諧ありて松
永貞徳をいりて宗匠をいりこれ終ふ

あつたすはくきぬはつちを侍るものとありぬき
ころん年あつて松尾楓青、山村季吟の門下
入て自西風をあらうし中真一流の程とありぬ
多ひ二子余人の門系ありて夷洛初とふたの志
多き唐平一株の芭蕉あるを号て人あつて
芭蕉の翁と号するふありぬまよりさほく愛
化せしつともとちう受ひは翁の流を志しひて能
借するこそめとてあられあふ能借といふふとある
べし一月風流を風雅の辭ありをうしとて
能借の名ありて満きと風雅乃実ありは
三つの物なり及ぶされは世俗のたゞとあるへしと支

考ふひたりもむへるうか能借をふより出さば
ものとのを思ひたまをうひ枕言染あしとて
考ふひをわしみあつて能借の名あしたとて
酒利の赤味常より出さばものありあれと酒利の
汁なり又そをうへさふらぬしされともあふら
たまをつらとて法そのとりあめもあつて時ふより
おしあれてつらふと考ふまのあつて燗味常
用るなり似たりとあつてへし又とて考ふもをら
流ひとて考ふあつて法と伴ふら向ふ十圍子も小
粒みふらぬ秋の風とてをうむかく味ひて俗中
の俗をともあれとてのりみ流さるやうとて

の亡者の妻ふめりも病のうつらむさきうりとしてあ
ふむめりもふ其まらう人あも病あふむせし
そふしきひおのものも能わりえ苦しみも
あふむしものひ焼しと限あし妻も子もあふ
上りし音もとりまけ淋しきふあしものあふむ
目のうあり電子薪さしえ何れとわらうしき
顔つとさあしし種あきま真垂し湯あき
さ山風吹たまきれ吹あしして涼しき
まうりあくとやまらるる地そとふ何せの
目もまおた浦あしわらうしきあふむし
あふむしきやと改をつり床のへて是の秋しき種

さうしふふしきあは先ゆるし種人と下さは母床
とりしてまらひ種ぬあのれも遠入して例よりもさ
せしう坂の登りぬいひきしまた登りまよとあふ
是とあきとさうりぬくし坂の登る裾麻おきと
さうりつたれしきまもあし種あしきあふむし
さうりもまらうしきあふむしひひてきしきあ
あふむしきまらうしき今そ名のまらうしき破坂をよむ
思ひきしきぬきあうしきあふむし目をあふむ
せは破浪まきまうしきあふむしあふむし
美しき浦の煙と清し人をかきあふむし
狗ふせきあし一秋を子秋年ぬきあふむし

跡せしはらと門遠きくしとれと人の多き地
トと竿ふかされと香具山ぬ干草んふ妙の衣と
んえ風ぬふれてと天津をとめ地領中振うとや
しとれ是を鼎ナベ不熟すき味ひ甘く能く人の脾胃
胃をととれお其印おほひありといひゆへしとれハ
常の能きと実乃ふ来あるや取捨得失の常ら
めつらかきとせ

蟬説

一飛

蟬小教種あり其かきとけしとひきとて世あり
色なき四五月は鳴わり夏後のくろ色ぬしとけ
ちみりとてセキ乃ぬく九十月ふなり夢凄急ふと
かしく鳴もあは色の青きわり落赤きわと教て
六七月最さくむあり又一種二月中小鳴あは地姑と
いふ馬咽より多快等なりとるやうて十七八種其
類ひ名収挙てかきとけしと日くしつとく
法師名を夢のけしちちやまをわけて凡を
いふのきあり内ふ又一つのおもれあるものあり啞
探といふ小兒まきと取て是ハ啞ありとをしとも
いふとけしとそくとしてられ岩ぬ松松の木の写れ
逍遥一書と春秋と志しとてあは短とせ

藍

身ハ寸余小まきまきして大を羨む自然の玉樂と智
女のあり業を以てあま米穀を盗み喰ふはさう
ひあく安然として風を吸ひ露を飲つ梢のまふ
飛ひて身を清潔にしてかの毒如塵ふまひま
目先の利のこふかこひ蟪蛄もあつさふ人を
笑ふ小似さうされはこそ陸雲も又徳をわけさられ
を賦し美塔あさうけくさ人を詠れあ人の年
たけ耳うさうありて鳴りおとさるるを憐れかこら
侍るる唐衣つさくか沈氏を玉のうて
あぬ英人の夢をま守とさへ詠し日蓮上人の
御書小わけ終ふとひうある因縁をともかれり前

生を齊王のさうた王を怨む死して化事候もの
ありやされは怨む人の冥犯のうれかうたを上人
やうて流後志まふあうんさうい様とぬけか
ふと以て彼乃鬼情いさうれさるものうたを
只色も喜もさうさうさ虫さるるを絶るものあり

朝起論

真貫

乾やうた^{カン}菴^{タン}乃つらふ^{ハチス}細^{ツカミ}さう一紫あうた葉と
あうらひつやうく日も紫やうたさうい^{ハチス}際と
殺多の葉もさうさうと喜あひさうい^{ハチス}名残

あく廣うりまはし〜けさひわや〜くも希見
うめも又もろ〜ぬる物やとあるんふき草花の
見さともさええさりき実蓮んんりさぬし
も風目さめ〜起物る〜り〜さ〜めや獨
こちまは子使例ふて曰汝者子釣藤
を好きたま〜釣起〜て家ふ来り〜得
たま顔あ〜と世もひひおろ〜る釣藤釣起
の猪狩あ〜子奪〜るあ〜んおねよそ釣藤
ハ人〜ろの拙〜にや〜釣藤とさ〜つねと
いきたあ〜〜釣あまめ〜さかの人昼寝
〜て源責せられ〜新ひ小異ありと〜も〜

ハ急乃罪のうれか〜かん只母の〜さ〜起そむ家の〜
を要とせと示〜る〜わ〜ま〜り風起朝せん〜せしも
假寐〜て既小賊害をよぬられたる趙正卿ありさる
をんもさ〜釣起〜〜一〜は〜ま〜る〜る〜後ふひふ
胡楸の丸香あ〜め〜も〜天地と〜〜美物も
おの〜釣用〜〜今〜て藤〜もの〜さ〜藤〜起
めうれ〜も自然の妙用あ〜〜不謂老子孫名を
されいひ〜る〜魚〜これと世景た〜れ釣用中
〜も小結目さめ能算〜性〜り〜め〜〜聊も
勸めひ〜かも急あ〜さ〜る〜あ〜〜てあ〜め〜や
ひ〜ん人見み夢ひ寝ふ〜る〜斤鷄大鵬の〜け

送鷹園主東遊序

静菅

一堂のうちにあやうく人を乾坤の外に遊を
志むるもの風人のとらぬ志を交ありとれハ
古人も幻術の才一とていれしうかの一堂の
茶を賣る翁やとらぬとて無人の境に
かゝるめをえりて終に竹馬を賣りて郷里に帰る
わらわの旅店に遇る方士の術をかりて刹那の
生涯の榮花をさくらめしもさむれハ榮飯のめえ
さふおとろくかゝは多しひめをわらぬ只一句ハ
魂の入るひとて飛々めをいふ作れ魂を

おもひたりたとい招魂の法を傳ふるも凡夫のたえ
やましく入つへき舟のたえさうり小機ひおんせ
まれの崑山の玉光りまじひ恍惚とてさまの
術をくくあふ夫百急と採り蜜とあはれ其の
其辛苦ふるも自然の妙術さうりいさや世その
修して函玄の圃小耕さんとさるものもその実
地ふりてまればあはれ景情を求るめをさうり
何そ只人を悠きや持るむるものもあはれん
鷹園のままおんさうりわらうてあはれ活細の
其の久しと年又甲斐の思弱小鞭を加へて
古翁の細乃のわしをたとり奥羽の勝槩を自得

せんすをおひさる嗟乎あは擧げおけるむじ
今尔感し〜とろと景と寓せし精神目録不
百倍〜有夢の画乃如ととわづきを写しし得
らん宣よろこぶをさう人や予も世怨ひあさめり
わ〜と今そ伏櫪の歎不沈して居るふあふ
るりわ〜を以てせめて〜錢祖の吟もろあ〜おひ
あ〜と〜居あり〜名區を想像されと筆を
展た〜風を捨るよりも〜あけま〜さ〜とあぬ
清小君と都三島の間に翱翔〜と〜歴る
ところの遠く予とあ〜る風光を弄い〜るあ
必代かく西のりりも〜りふあ〜ひて在を縁

丹さたらふりあうれたとい松島象深の美景を
か〜しとも露上の舟ち〜り〜〜早〜帰鞍
志〜す〜

小築記

對山

それ家小わり〜松さ〜ひ〜様をさん
う〜れ〜と〜い〜入〜と〜やひ
心み〜こそお〜つ〜め〜ら〜あ〜わ〜
吾さ〜戸乃小庭あ〜太山あ〜の〜あ〜もの
僅小〜も〜を〜つ〜つ〜ひ作

垣みとかくは所のまじりふさひものりきり
いせくもそめくふ三疊のかられ形をつらりて
観修のいとはあるとてさるるか小義素乃
墨の痕をきよめこのより卓じつを爐に
かこつふあは是あのれうたふ主とさるる
をかりこめく白炭のむらさやを志の
まのたよりみさくくき業あめれと風爐
平かくてをまじりてさるるのりさひひり
時うりゆくこととさるるまじりてさるる
ふられたまふつふ人さるる志とさるる
くさるるもさるるさるる人あはれ業砂

とる事をもみて共平主客のさるるまじり
をかきさるるもさるる安さをさるるための
一家あはれありさるるとさるるあや嵐をさるる
まじりつちめくくのたふひあやと笑ふ人もあは
んうしあは南港小築とりふ竹東居のいそ
まねくさるる社交めくしこの四字を業融ふ
鐫おくりたるよりつひそれおさるるせかきよふ
るりあはありぬまは澤姑をめつるるあまりの
戯まふ赤電子鴉爪室あし書るるもさるるし
また似てさるる免図らしかるるといふ母や

きつりいとうろ人の殺ふあさうねてそれともえりぬ
ちてあそまの慶あまぬうはま宮はいらまらめ
くりあううう式のまはるをまらあうのむ
あう神國と名うらうのむうに坊まううう
かりとのまてくまはらひ幕もかくしうあ
場をまうけまう社勢津まら鈴屋へむとあ
うらうああうおあううううううううう
とらうあううううううううううううう
あううううううううううううううう
ううううううううううううううう
か平志とて車をあまらううううううう
翠簾

きうく捲うぞてかうあみやせの宮は子をううう
の餐盤を俱しううううの禮杯をまうむみうりの
殿を難波の埋管をわうううあ君の醫使かうう
来うううあはわけの威儀を志あううううのう
のを別當は傍侶の何とぞううううううう
めうあもつうううも難色はうあうううう
あうううううううううううううううう
まうあうううあうううううううううう
あのをさうううあううううううううう
のあうううあうううううううううう
はううううううううううううううう

ねもたしらひしきたうも強めてはらさる市女笠の
 うのかいさうも髪もあるあもてかたねるを眉深小
 意ふせり事さひのみほやかまぢのしきた道り
 なるまゝいさあめりしきをお名の縁のちのねお
 られあめのうらめししうさつれう守あ孫もさけ
 帯はうへすかし禪徳下あふけさる事し
 事らにはまてる神も禱としとやんそあをまてん
 田楽法外のおらたてりれ魚さるうらさる
 そ衆徒白布のぬく免よその具いさるうら
 ぢうあるよしあはくさうしうさふあうの伴の
 ちかふ心ま白柄のも刀の鞘をさうしあは下結

ちらあうとあまあししてどのいふあまきいし
 の毛あうみやさてゆらうとあもさうた母将乃
 出さあまはのあうりま杖とて法華をまて
 くうらと強うらものあうりまてさうせもさうも
 ぢあふまてらしおはさる神田の境を押あさり
 つまららふかのあうけの場お入まてこ女子田樂ら
 かあまあうたて床儿おけけを流徒を社勢のむ
 うまあまあまてらさうみてあうの地の扇をさうら
 ちうさうし招うとえれえ長刀をわらあまを横
 さあ子孫をあまきに思をちとまにさうらう
 社勢のかく孫り申くまにわく孫りうくしとあわ

あつたての御しつとてまらたけく申ふたあを
みあつたての御しつとてまらたけく申ふたあを
あつたての御しつとてまらたけく申ふたあを
あつたての御しつとてまらたけく申ふたあを
あつたての御しつとてまらたけく申ふたあを
あつたての御しつとてまらたけく申ふたあを
あつたての御しつとてまらたけく申ふたあを
あつたての御しつとてまらたけく申ふたあを
あつたての御しつとてまらたけく申ふたあを
あつたての御しつとてまらたけく申ふたあを

名杖の雲と宮殿の御しつとてまらたけく申ふたあを
あつたての御しつとてまらたけく申ふたあを
あつたての御しつとてまらたけく申ふたあを
あつたての御しつとてまらたけく申ふたあを
あつたての御しつとてまらたけく申ふたあを
あつたての御しつとてまらたけく申ふたあを
あつたての御しつとてまらたけく申ふたあを
あつたての御しつとてまらたけく申ふたあを
あつたての御しつとてまらたけく申ふたあを
あつたての御しつとてまらたけく申ふたあを


~~~~~つら新考んかも

折箏銘

寥松

あゝあけおあけさるわの〜あま<sup>コ</sup>龍もあま<sup>コ</sup>龍ひて  
志~~~~眺めふらう〜と愛ましたまらちやゆき  
顔~~~~うたして極あられさあう〜まもも~~~~  
~~~~ひもとあわ〜わん~~~~わん~~~~かよか〜し  
~~~~一え四千五百歳の暮秋も瞬くあふる~~~~  
あ〜思ひあ~~~~うま〜し〜も~~~~し〜も~~~~あ  
~~~~り~~~~~~~~清きものさあ〜し~~~~葉の戸よ

起外の~~~~らひ~~~~名つらて愛丸とよふいさゆる
角調八尺四寸あるものをたのめ舟縮め遠き旅折
箏あり菊希明うかれ不成て怨ふ愛の一字を鷹の
峯太虚庵の墨跡を捨つて離る憾ら~~~~と五つ
爪習うと~~~~と十二の個魚其意あを~~~~し
それともあ~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~
あもか~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~
わ~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~
愛ふ~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~
か~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~
~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~  
~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~ら~~~~


何れもいふをよひしを好めたるの簀
檜あづらんよりも程なきはしうあまのいひ
吾のいひをいひしを好めたるも破る人と思ひし
ささうに捨てるはこそあつらふも無慈悲あれ候
弾ともくささうし何もの死なきとてさう
しむるや

鶯鳥辞

斥鷃を九霄の鵬を以て鶯と甲ふ似合て穴
を穿る鳥を鶯を以て鶯と甲ふ似合て穴

うゝあゝあゝをむらけあさかの梅は白ひあや
雲むすの秋も五月梅の晴るわやあくえと
秋も秋の秋の月のゆけさあもうら啼いて蘭
閨錦帳の夏をや婦を妻樓の曉さぬ軒を警
うし旗をぬゆあへあを啞くさささうあ祥と
啼て遠く境の人を志こそ目のおのりもむら
うゝあゝあゝぬあまひを抱き泪如雨と詠せしも実
さそあゝんかゝいれあれハ貞觀の帝ハ一枝小
かへて金樹小棲志あんとその事はいひしや
あぢうぬ君とさうくとそ啼くつけしハかゝあま
めさうさうらん地そせしは笳のあささうと人の清と

ちぬくれはわしと夕へとあゝ糞土のまうれを啄
 牛の腐肉を喰ふととる黨をあの陣をあし
 めるを市中に眞餅を給ひ又ハ邑里の家根を
 堀り小多共菓をくひあゝ其振露ひわけをく
 うゝ能程控現あゝうゝハ林氏の鶴あゝうゝはし
 ととかくとくかく汝の罪をせめ候も彼の舟騎の
 待とふとあゝに待るも汝を電め候とてとて
 あゝ筆ととてとて

日本橋南壹町目
 須原屋茂兵衛
 浅草茅町二丁目
 須原屋伊八
 同 茅町東中代地
 野村新兵衛

嘉永六年癸丑冬十一月補刻

江都 發行 書房

日本橋南壹町目
 須原屋茂兵衛
 浅草茅町二丁目
 須原屋伊八
 同 茅町東中代地
 野村新兵衛

